東日本大震災における霞目SCUの活動報告
―陸上自衛隊東北方面衛生隊と民間医療組織による共同運営―

（犬飼美保ほか、日本集団災害医学会誌 18:6-31，2013）
2013年10月25日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

はじめに

東日本大震災において、陸上自衛隊東北方面衛生隊(以下、衛生隊)は宮城県から広域搬送臨時医療施設(Staging Care Unit:SCU)の開設要請を受け、陸上自衛隊霞目駐屯地にSCUを開設した。SCU は衛生隊と災害派遣医療チーム(Disaster Medical Assistance Team:DMAT)、日本赤十字社医療チーム等、民間医療組織と共同で運営された。宮城県では近い将来に高い確率で宮城県沖地震が発生することが予想されていたために、陸上自衛隊東北方面隊は地方自治体や防災関連機関と 2002 年から毎年共同訓練を行っていた。2006 年には宮城県災害医療コーディネーターを中心に、衛生隊と仙台病院と連携を深めてきた。2008 年には宮城、岩手の 2 県 22 市・町が参加した大規模防災訓練「みちのく ALERT2008」が開催された。2010 年には仙台病院が衛生隊と DMAT の共同訓練を開催することとなった。このような背景があることにより、東日本大震災では衛生隊と DMAT を中心とする民間医療組織が SCU 活動することが実現した。

SCU 開設までの経過

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分の東日本大震災が発生、午後 6 時 40 分に自衛隊は宮城県より霞目駐屯地に SCU の開設を要請された。衛生隊は SCU 開設用の野外病院用のベッドと毛布、ストーブ等と、SCU で必要となる可能性のある医療資器材として外科処置セットなどを車両に積載した。同日午後 10 時に霞目駐屯地に向けて出発し、3 月 12 日午前 0 時から SCU 開設を開始した。午前 6 時に開設を完了し、午前 7 時に宮城県災害医療コーディネーターと DMAT が到着、午前 8 時から患者の受け入れを開始した。

活動内容

SCU への搬入要領はヘリ着陸地から自衛隊員が担架搬送をし、SCU テント前でトリアージを行い、トリアージの色別にテントに収容することを基本とした。3 月 12 日から 13 日は、自衛隊ヘリに限らず多くのヘリが離着陸したために、着陸場所が SCU から離れた管制塔近くのことが多かった。そのために着陸地から自衛隊の救急車で SCU まで搬送したり、管制塔付近まで出向いてトリアージをする必要性が生じた。後送先への調整は DMAT 統括者が行った。DMAT 等のもつ無線により、傷病者の受け入れ、後送情報、DMAT 等の活動状況、宮城県内の受け入れ情報、地域の被災状況などの情報を逐次得るようにし、本部入り口に設置したホワイトボードに記載して情報共有を行った。

考察

SCU 開設のリソース群として陸上自衛隊衛生隊の収容所用装備が有望であることが指摘されていた。その理由は、陸上自衛隊が全国に展開する師団等衛生隊の標準装備によりSCU を開設可能であるからである。しかし、東日本大震災以前には自衛隊が SCU を開設する機会はなかった。東日本大震災においては、迅速に自衛隊に対し SCU の開設要求がなされた。それは 2010 年 12 月に行われた仙台病院、衛生隊、東北方面航空隊と宮城県災害医療コーディネーター、宮城県 DMAT が行った霞目駐屯地飛行場での共同訓練があったからだ。この共同訓練により、自衛隊衛生隊が保有する装備で SCU が開設可能であることが検証されたからだ。また、SCU の開設は共同訓練とほぼ同じ規模であったため、非常に円滑に行うことができた。

今回の最大の反省点は、SCU の開設場所を含めた飛行場の使用方法に関する検討が事前に全く行われていなかったことである。滑走路管理の特殊性から後送のための車両乗り入れや駐車場の確保が困難であった。そのため、DMAT 等が帰還するための大型バスの乗り入れに関して、場所の調整や誘導に人手を要することとなった。今後起こりうる大規模災害に備えて、検討しておくべきことである。